001　ポンポン山　030120
◎ぽかぽか陽気、「もったいないねえ　いい日照り　ちょっと散歩でも」「自転車で　上の口　まで　行ってみるか」ご飯にふりかけを、たくさん残っているおでんを、箸を、水を、ザックに詰めた。
◎上の口に着いたのが 1 時前、いやや　ここは遠い、登りの坂道がきつい、もうすでに疲れている、こんな時間、ポンポン山は遠い、途中でひき返しは、いやだけど、もうこんな時間だよ。
◎陽光うらら、影きらきら、空は青い、白い雲。昔の参道を行く。新しい道路ができているが、参拝の人々は、昔からの参道を通っているようだ。確かにここは、寺のはずだけれど、大きな鳥居がある、鳥居の裏に、神峯山寺と彫られている。ま、いいか、八百万で。
◎2 時間ぐらい歩いてきた。平地にくらべ風は冷たい。陽が照ったり隠れたり、おひさんが顔を出すと暖かいね。正月というのに雪の気配もない、「秋か春の陽気だ　積雪はもう 10 度ぐらい　下がらんと・・異常気象だね」

◎50 号の絵にてこずっている。去年から持ち越している。昨日おもいきって、赤い絵の具を大きく入れた。赤に白を混ぜ、大きな面積を筆でいれた、そのあと、スキージーで、こすり、はじき、ふき、「まだだ　なんとかなってくれと思いつつ　まだだ」今もまた一筆入れたが、「まだだ」
◎台風の爪痕がまだまだそのままだ。思い出す、すごい台風だった、今まで、「台風は　我が家には来ない　いつも雨戸を閉め、接近時間を待つが、上空の風音は聞こえるが　そよ風だった」この台風は風で家が揺れた、驚いた、じっと過ぎ去るのを待った。一週間後にポンポン山に登った、びっくりしたねえ、樹がなぎ倒されている、風の通り道の谷筋、大きな杉の植林が、爪楊枝をばらまいたように倒れていた、それがまだそのまま残っている。
◎先ほどの絵の話、赤に黄を混ぜちょっと朱色っぽくした絵の具を塗る。赤に白を混ぜ隠蔽力を強くして、下のごたごたを隠す。その上にレーキ系の赤で渋くして、乾いてから生の赤をワンポイントにこすりつける、これが成功すれば綺麗はず、うまくいくように願いますよ。

◎3 時過ぎにてっぺんにやってきた、「え　こんなに近かったのか」「二年ぐらい前　歩いても歩いても　着かないねえ」と思ったのが・・。「いやあ　疲れた　つかれた」「追い抜いて行った若者がいない」大きな街並みが見えると磁石を出した。「どこの街？」こっちには大阪の街が霞んでいる、ハルカスまで見える。淀川の流れが蛇行している、高槻のビル、大日のビル、見えるねえ。かえって地図を調べよう、地図の読めないおっさんを実感。てっぺんから東に見える大都会は、手前が、長岡京・向日・桂でその向こうに、伏見があり京都市が全部まる見え。車や電車で帰るとき、京都市と洛西が線で繋がっていると思っていたが、京都市と洛西は引っ付いた面だったのかとあらためて大発見なり。何度か行った善峯寺あたり、長岡京からきつい坂道を登った記憶があるが、低いとはいえポンポン山から見ればまだまだ低いところのようで、ここが一番高いところなんだ。
◎4 時に本山寺まで下ってきた。寺に寄らずに下ろうと思ったが、水がこいしくてちょっと寄った、汗をかいたあとの川の水は旨い。本山寺はいつもひっそりしているが、張り紙に、「正月三日　午前四時より　護摩供養」と出ている。ぼちぼち人が集まり食事と仮眠をとって、「ナンマイダ　ではなく　ソワカ」かな。そうそう、衣川さんがやっている、ソワカと唱えつつ、鈴を鳴らし、木片を燃やし、炎を上げ、祈るのかな。この寒さ、水や滝には入らないだろう、それでも川のある場所では、水に浸かる修行もあるのかな。

◎5：15　自転車がおいてある上ノ口のバス停にやってきた。もう薄暗い、車は全部ライトをつけている。帰りの自転車、気を付けなくては。まず、急な下り、ブレーキをかけつつゆっくり慎重に下りた。高速道路のガードをくぐれば、道は平らになる。暗い高槻の町並み、知っている道を行けばいいのに、車の少ない細い道を選んでしまった、「え　行き止まり　あれれ　JR を超えられるか　阪急を超えられるか」往路も何度か迷ってしまったが、復路はなんとか、勝手しったる寿永小学校のあたりに出てきた。帰ったのが 6 時過ぎでした。まさかあんな時間出て、全行程自力で　ポンポン山まで行けたもんだ、満足だ。

002　画集　070120
自分の　画集が　あれば　自分の　画集が　もてたなら
若いころに　こんな夢を　見ていた
五十歳　くらいの　ころ　パソコンを　てに入れた
何のことかなと　ボタンを　押し　これが　キーボード　これが　アイコン　ひとつひとつ　教えてもらった
オレには　縁のない　機械だよ　そう思っていた
覚えなきゃ　やらなきゃ　尻を押され　背を突かれ
買いなさい　そういわれ　最初に　買ったのが　アップルコンピューター
リンゴを　ちょっと　かじった　マーク　あのマーク　おしゃれだね
買いなさい　イラストレーター　と　ホトショップ
高かったんだよ　小さい車　買えるぐらいの値段
知り合いのデザイナー　おれなんか　ベンツ　買えたよ　儲けるたびに　アップル投資　だったよ
いろいろ　覚えた　インターネット　通信　ホームページ　こんなことが騒がれだした

ちょっとまて　これらを使ったら　画集ぐらい　簡単に　できる　じゃないか
紙の上でも　モニターの上でも　画集ぐらい　簡単に　できる　じゃないか
かしこまった　文章　きれいに撮れた　写真　手造りの　字と　絵と
紙一枚の　画集も　ホームページも　たくさん作った
おおはしゃぎ　したねえ　うれしかった　ねえ　ペインティング　とは　絵のこと

何日か前　に知人に頼まれ　64ページの　冊子を作った
やっつけしごとで　時間がない　資料がない　ヒーヒーいったが　なんとか仕上がった
そのあとに思った　オレも　オレのものも　オレの画集も　作りたい　なあ
10ページ　ぐらいなら　500部　ぐらいなら　安く　作れるかな

ええと　どの絵を　選ぼう　かな
ええと　題名は　どうしよう　かな
ええと　文章は　能書きは　どうしよう　かな

デザイナーの　作った　ものは　きれいだ　なかなか　オレは　しろうとだ
表紙の　デザイン　むつかしい　ええい　簡単に　基本に　何にもなし　字だけ　白い紙
こんなことを　いいながら　手描きの字　作ってみようか　画面　半分　色を　入れようか
赤か　緑か　黄か　青か　グレーもいいね　薄い　グレー　濃い　グレー
絵は　近作にしよう　大きな絵　在庫の絵　写真を選んだ　20枚　ぐらい　選んだ
パソコンの　中に　写真　日付と大きさが　書いてある
イラストレーターで　表紙を　作った　11ページに　絵を並べた
表紙は　名前だけ　オレの　顔写真　入れるぞ
絵の　ページは　日付と　大きさだけ　しんぷる　しんぷる

ちょっとまて　写真　絵と　あわせて　色あわせ　しな　くっちゃ
ぐるぐる　巻いた　絵を　ほどいて　二日も　かかって絵を　探した　探してから　決めるべき　だった
さあて　どんなのが　出来上がるかな　と　楽しみである　一冊　100円足らず　さしあげますぞ

003　安威川　090120

今日は強い風が吹いている。空の上、ぴゅーぴゅーうなりごえが聞こえる。午前中に自転車で図書館に行ったが、「少し暖かい日だ」というぐらいでのんびり走らせた。この図書館の話、ちょっと憂鬱なことがあった。年末に音楽 CD を借り、とっかえひっかえ聴いていたが、誤って CD のケースを床の上に落としてしまった。「あれれ」と思った時には CD のケースが潰れていた。「どうにか　直せないものか」「直せないなら　新しいケースと　交換できないものか」いろいろ試みたができなかった。謝らなければとしおしお受付で話した、「はい　預かります　こちらで修理します　けっこうですよ」という返事に、一年越しの肩の荷が、スーットおりた。機嫌よく新たな本を借り、食品スーパーで旨いものを何点かを買い自転車で家に向かった。もう昼頃だったと思うが、自転車が前に進まない、「なんだ　この風　すごいな　こんな風　はじめてだ　自転車が止まりそう」と苦笑のひと時。市街地を走っていて、こんな風は初めてだ、風はきつく吹き、またおさまり、またふいた。

昼飯を食って安威川にやってきた。相変わらず、ぴーぷーは吹いているが、いつものところに自転車を止めた。いつものところだが、風でひっくり返らないように壁ぎわの風が当たりにくいところに止めた。土手に上がり走り出した。これまたくだらない説明だが、走り出したというけれど、「お前のは　歩きだ　走りとは　宙を飛ばんと」というように、かっこうは走っているさまなんだけれど、足は常に地上にあるらしい、という、格好の悪さである。川の水を見やると川下から風が吹きどんどん上流へ押しやられているような波が立っている。「ほう　すごいな　おまけに水が濁っている」昨日からの雨、今朝もオレが起きるころにはまだおおいに降っていた。西風の吹く土手の上を西に向かって走るオレ、描写は勇ましいが、えっちらおっちらである。

カモとオオバンがいる、いつものカワウとカラスとハトがいない、そのうちあらわれるでしょう。上西さんがいうには、「猛禽類も　時々いますよ　飛び方が違います　ツービートで　スーイスイ　ハトやカラスとは　飛び方が違います」と聞くのだけれど、ハトやカラスも単独でツービートでスーイスイやってくるし、ということでなかなか猛禽類にはお会いできない。

走っているとカモがいる、大群だ、といっても 50 羽ぐらいかな、同じカモに見えるが、上西さんの観察日記では、カモにもいくつか種類の違うものがいるらしい。「この時期、繁殖期に入り、羽の一部が　鮮やかな色に変わっていきます」とも聞いた。下流のこの辺りでは鳥も警戒していてあまり近づかないが、上流では餌付けのせいか、近くまで寄っても逃げない。そんな中でカモが飛び立つのを見ると、横腹のあたりの羽がブルーやグリーンの鮮やかな色が見られた。褐色だけかと思ったカモ君もなかなかお洒落だねえ。

河川敷の手すりに花が活けてある、その花が風で倒れている。一か月ぐらい前にきれいな花が活けてあったが、時間とともに枯れてきて、これは第二弾の花、今日の風で倒れている。もう相当年数が経ったと思うが、ここで三十歳代の青年が倒れ死んでいたそうだ。彼は近所のコンビニあたりで何らかの事故にあいここまで運ばれ遺棄されたらしい。交通事故死か殺人か、現代の警察の科学捜査力なら犯人がすぐに浮かびそうだと思うが捕まっていないのだろうね。

今日は暖かい、空は黒い雲がべったり覆っているが、青空も見える、太陽の位置もわかる、「雨のち　曇り　時々晴れ」なんていうような天気なのかな。この暖かさ、ほんとうに冬なんかねえ。

川幅が狭くなったところ、水が白波を立てて流れている。その先に小さいごみの中州がある、枯れ草やら枝が絡まった中州のはしに白いサギが首をすくめじっとしている。水の流れを見ているようで、獲物の魚を探しているのかな。蕪村の絵だ、雪は降っていないが蕪村だ、いいねえ、ススキが光る。

004　淀川　130120

去年に続いて淀川の本を興味深く見て、「江口」という地名に振り返った。オレの小学生時代は鳥飼村に住んでいた。鳥飼村は淀川右岸、土手のそばを4キロぐらい占めている。小学校までの距離を測定してみると3キロ足らず、当時の子供の目線では4キロぐらいあったと思っていた。

江口は当時、「江口橋」と呼んでいた。50年以上前、まだまだのどかな時代、淀川の土手の上を自転車で走って江口橋に何度か映画を見に行ったことがある。母親と小学低学年の弟と三人で映画館に入った。当時は車も少なく土手の上の道路もたまに車が通るだけ、江口までの村々も田んぼが広がりぽつりぽつりと家が建っていた。淀川沿いには大きな工場も二つほどあった。

平安時代、江口・神崎（尼崎市）・蟹島（大阪市淀川区加島）の三か所を訪れた大江正房は、「天下第一の楽地」「門をならべ戸を連ね　人家絶ゆるなし　倡女（うため一遊行女婦＜うかれめ＞万葉集に出てくる　以後ゆうじょと呼ぶようになった）群れをなし　扁舟（へんしゅう　小舟のこと）に掉さし　旅舶に着き　もって　枕席（ちんせき　ベッドを共にするの意）を薦む」

中世の遊女（あそびめ・うかれめ）は芸能や宿泊業が中心で、近世以降のように必ずしも売春を伴っていない。藤原道長・頼道・後鳥羽上皇・後白河上皇らと、遊女の交流が残っている。また遊女が母親なのは、一条信能・徳大寺実基・源為朝らがわかっている。

能に、「江口」という題目がある。いつものようにその舞台を見たことがないが、そのストーリーの成り立ちに興味をひかれた。

あらすじ：諸国をめぐる僧が天王寺の参詣の途中に、江口の遊女の旧跡を訪ねた。里女が現れ、江口の君が西行を諫めたことを語り、自分は江口の君の亡霊だといって姿を消す。やがて、江口の君が遊女二人を伴って舟で現れ、舟遊びを見せ、仮の世の現生への執着を戒めて舞い、本来の普賢菩薩の姿になって西の空へ消えていく。

新古今和歌集：鎌倉時代1201年、後鳥羽上皇の指示で、藤原定家らによる勅撰和歌集の編纂が始まった。5年足らずの時間をかけ、全20巻1980首の歌集ができ、下記の歌2首が収録された。西行と遊女の出会いは、謡曲や長唄に形を変え語り継がれた。遊女、妙は、「江口の君」と呼ばれるようになった。

西行法師：天王寺に詣で侍りけるに、俄かに雨の降りければ、江口に宿を借りけるに、貸し侍らざりければ、よみ侍る。遊女妙（たえ）の返し。

当時、都から南下し宇治・桂・木津の三川合流あたりの、淀津で乗船、一日がかりで江口の宿にやってきた。にわか雨にあった西行が、一夜の宿を頼み込んだ。主人の遊女は貸そうとしない。西行は、「この世を厭い　出家するのは難しいかもしれないが　貴方はかりそめの宿を貸すことまでも惜しむのか」遊女は、「ご出家の身だと伺ったので　こんな仮の世の宿などに心をお留にならないように」と遊女屋に宿を求める西行を皮肉交じりにやんわりからかった。この贈答歌は西行存命中に、「山家集」に収録された。妙も後鳥羽上皇に頻繁に招かれたり、藤原定家の日記、「明月記」にも名前が出てくる。

世中を　いとふまでこそ　かたからめ　かりの宿りを　おしむ君かな

世をいとふ　人としきけば　かりの宿に　心とむなと　思ふばかりぞ

005　淀川 - Ⅱ　180120

平安時代から淀川は運送の大動脈だった、川に船を浮かべ人も物も運ばれていた。淀川は川底が浅いので三十石舟という小さいものが使われていたという。もっと上流の京都高瀬川は輸送のために掘られた運河だが、ここはもっと川底が浅く、平たい高瀬舟がつかわれていた。淀川は歩いて中に入るなんてとても無謀な深さと流れだけれど、高瀬川は歩いてぱしゃぱしゃ歩けそうだ。

三十石舟とはどれぐらいの大きさなのかと調べてみた。長さ 15 間、巾 2 間となっている、現代の大型観光バスの 3 割ぐらい大きいが、船なので前後が細く、船頭が掉さして動き回る面積が相当大きく占めていたはずなので、人や物のための面積は大型バスと変わらないかもである。定員は 30 人ぐらいまで、床に座るか寝そべるか、昼の便と夜の便では乗客の様子も違っただろうが、壁も窓もない、すだれのような屋根、しかもトイレがない、こんな船に半日も乗せられたら、「しんどいだろうね　たまらんね」というのが正直な感想。暑い季節は川風に吹かれ快適だったかもしれないが、冬の吹きっさらし、雨の日の濡れかげん、これは過酷な状態だったかも。現代の観光バスは定員が 50 人ぐらいらしいが、2 時間ぐらいでトイレ休憩があり、食事できる場所もあり、比較にならないぐらい快適なのでは。

落語に、「三十石夢の通い路（じ）」という題目がある。この話は、江戸時代に大いに流行ったお伊勢参りの最終部分、まもなく浪花に帰ってくるという部分だそうだ。You tube で枝雀、文枝の二人を聞いてみた。若いころは落語も面白く聞いていたが、どうも最近はなじめない、面白くない、楽しめない、とはいいながら、「三十石夢の通い路」のストーリーはわかった。毎度ばかばかしい熊さん八っさんが、京都伏見から船に乗って浪花まで下る道中のばかばかしいお話だ。

当時、瀬戸内海の海運になれた人たちが船の運航に携わっていたらしく、朗々とした舟歌、労働歌が謡われ、旅で浮かれた若者が一杯機嫌、隣の男と、横の女と話し笑いけんかする。現代の電車内では見られない光景があったのか、ただただ落語だけの世界で、じっと黙って半日乗っていたのか、これはわからない。

淀川の水、これはきれいだったはず、すくって飲めたのでは。魚はいたかな、今ではでかい鯉が時々泳いでいるが、食糧事情の悪い当時、そんなご馳走が居ようものなら、血眼になって捕っていたかも。草木は同じだろう、今と同じようにススキや葦が、所狭しと生えていたと思いたい。堤防も今の三分の一にも満たない高さ、流れの横がすぐに堤防、ちょんちょんと上がれば、村が田んぼがあったのでは。

三十石舟：登りは大阪天満の八軒家（現在の松坂屋あたりらしい）を出発。12 時間で伏見に着いた。登りは時速 5 キロ、下りは時速 10 キロ。登りは船頭が棹を押し、岸で船引人足が重労働の見本のように玉の汗で綱をひっぱった。絵図がある、ふんどしいっちょう 4 人の船頭が、身体を弓なりにして棹を川底に突き刺して踏ん張っている。木造の船、三角屋根には藁のようなものが葺いてある。壁も仕切りもないので横から中がまる見えの吹きっさらし、船底に胡坐をかいて、座る人々が見える。

年に何度か淀川の河川敷に行くが、水の流れ、その量は安威川の比でなく、たっぷりの水、あそこに落ちてはまれば、今のオレなら間違いなく溺れてしまう、余程泳ぎが達者でなければ溺れてしまいそうと思われる勢いだ。今と古代近代でそんなに水量が変わらないのではないのかな。小さいとはいえ米俵を三十石詰めるような大型の船を、上流に向かって引っ張るのは大変だったと想像できる。

お伊勢参り：江戸時代には、「一生に一度はお伊勢さんに」といわれ、全国のひとが憧れ、参拝した。当時一般人の通行は関所で制限されていたが、「伊勢参り」ということで許可されたらしい。

浪花から伊勢本街道を歩く：このサイトでは、「玉造稲荷神社」を起点に、「暗越（くらがりごえ）奈良街道（国道 308）」から、「伊勢本街道」に入り、「伊勢神宮」まで 170 キロが紹介されている。玉造→南生駒→天理→榛原（はいばら）→御杖→横野→田丸→内宮、この行程を 8 日ぐらいで歩くらしい。

006　淀川 - Ⅲ　200120

淀川の本を読んで、淀川のことばかりを文章に書いていたが、「ええい　行ってみよう　久しぶりに」とやってきた。午前中は晴れていたが、なんだか薄曇り、明るいが青空はひとつも見えない。土手の近くまで来ると、「三島江浜」と書いてある。浜だったとは、海の浜なのか、大きな川の砂浜だったのか、ちょっと上（かみ）が、「唐崎浜」と標識に書いてある。三島とは大きな地域で、ここはその中の、「三個牧（さんがまき－地元では-さんがらまき)」というところだと思っていたが詳しくはわからない。自転車で 20 分ぐらい、ここは高槻市だ。

土手の上にあがった。「でかい」対岸まで 700M ぐらいかな、川幅は 300M ぐらいしかないが, とうとうと、たゆたゆと、流れている。前回も書いたが、この寒さでなくても、オレあそこに入ったら溺れ死ぬだろうね。自転車を置いたところに、大きな石の灯篭と石の標識がある。神峰山寺・妙見山と書いてある。
◎三島江の　玉江の薦を　標（し）めしより　己がとぞ思ふ　いまだ刈らねど　万葉集

かつてここは河港があった、三十石舟の停船場所だったかもしれない。対岸の枚方との渡しもあった。当時の絵も載せられているのを見れば、人の背の倍ぐらいの堤防を階段で上がれば、道路があり、茶店やら宿やらの家があり、人が牛が馬が歩き、灯篭やら道しるべがあり、川からあがれば賑わいが描かれている。

土手を無理して下に降りた、やぶこきかな、いけるかな、いつもの山の調子で歩いた、バラの刺だ、冬の厚手の上着でも刺さる、いてて、やっと河川敷の道に出た、笑っちゃうね、こんなところでやぶこぎなんて、野犬に注意、奴らは怖いねえ、数頭かたまれば、恐ろしいよ、きゃあ～ンという奴なら、いいけれど、なかには、吠え立て、向かってくるやつがいる、そいつが先頭で、あとの奴が来る、そらあ、怖いよ。

支流、これはなんという川かな、かえって地図を見ると芥川だった。芥川は、ポンポン山のふもと原村・出灰（いずりは）から、摂津峡を流れ、ここに来ているのか、懐かしい、知っている名前がどんどん出てくる。

鳥が多いね、いっぱいいるね、安威川の鳥とは種類も多さも違う。なんだか葦の生い茂った草むらから、「ぎよごげ～」なんだあれは、黒い大型の鳥、びっくりだ。

枚方大橋までは河川敷ゴルフ場、橋を超えると川の流れに近づける、流れのほうに曲がって、とっとこ走る、船着き場がある、いっちょうまえの舟を止める鉄の杭（何と呼ぶのかな？)、何かの時の近代的な船着き場、土木資材を運ぶのか、救援物資を運ぶのか、過去の水運が使えるように立派な船着き場だ。

何度か来たことのある高架鉄塔の下、今日はここで折り返し、ここから帰る。高槻の山並みが、水無瀬、大山埼、天王山と続いている、対岸は枚方の街が邪魔して生駒の山は見えない。流れに近い河川敷公園に石の道標がどっかりある。人より少し低いぐらい、「京都・伏見」「高槻・富田・茨木」「枚方・河内」などと彫られている。

だいぶ帰ってきた、芥川が合流する当たり、けっこう広い面積の三角州、細い川なんだけれど、砂をたくさん運んできたのか、そこらあたりを埋め尽くしたのか、自然の流れは力強い。大阪平野は 2000 年ぐらい前まで、まだまだ海だった、たった、2000 年 3000 年で埋め尽くされるのなら、もう 2000 年 3000 年も経てば、瀬戸内海は陸地になるのかね。

陽が沈む前の西の空が明るくなってきた、青に紫に緑に赤に、言える色が全部そろって、ほんのり、ぼわ～っと、輝いている。お流れのそばに、ぽつりぽつりうお釣りのおっさん連、サイクリングヤロウが飛ばしていく。

007　淀川－Ⅳ　220120

　これは、淀川の話というより、船の話です。かつての淀川に浮かんでいた三十石舟とはどんな船かな、ほかの船のことも知ろうとサイトをパラパラ、面白い文章を探し当てたので紹介します。

◎淀川の三十石舟、京都高瀬川の十石舟、琵琶湖の丸子船、菱垣廻船、千石船、北前船、遣唐使船、などの名前は知っているが、どこまで知っているのかと聞かれ、水に浮かんでいることだけしか知らない自分を知った。
◎琵琶湖の丸子船には、船の横に木のマルタを半割にした部材が取り付けてある。この部材の特徴が丸子という名前の由来らしい。
◎和船は、国内向け、蓋のない「桶」形式、大きな厚い板を並べて造る、なんと杉材の厚みが 10 センチ。それに対して洋船は、外洋向け、密封された「樽」形式、竜骨を一本通しそれに直角に薄く小さい板を組み合わせる。
◎丸木舟。縄文時代の遺跡からも出てくる。日本海側はスギ、太平洋側はカヤだそうだ。
◎沖縄や九州の縄文遺跡から丸木舟を作った丸い石が出てきている、これが遠い南の国でも出土している石と同様だということを読んだことがある。日本人の一部は南のほうから海を渡って日本にやってきたという話。

本田成親著＜遣唐使船の構造的欠陥＞

　遣唐使船をはじめとする古式和船の第一の欠陥は、海水を完全に遮断できる気密甲板を備えもっていなかったことである。甲板に完全な防水処理を施すだけの技術がなかったうえに、積み荷の上げ下ろしを効率よくおこなうことが優先されたから、現代の船のように船倉を気密度の高い甲板で覆うことなどはあまり考慮されていなかった。＜略＞千石船や北前船などでさえも、嵐のときに甲板が激浪に洗われたりすると海水が船倉に流れ込み、たちまち転覆の危機にさらされてしまう有様だった。転覆を避けるために積み荷を捨てるという非常手段がとられていたという。

　遣唐使船の復元模型を見るかぎりでは一応その船倉は甲板で覆われているが、実際の甲板の構造はせいぜい厚板を密に並べ張った程度のものだったと推測される。耐水性のきわめて低いそのような和船にとって、小山のごとく盛り上がり、上方から船を押し潰すようにして甲板に叩きつける暴風時の激浪を防ぎとめることなど、どう考えても不可能だったに違いない。古式和船の第二の欠陥は、船底部が竜骨をもたない平底の構造になっていたことである。

　紀元前の昔から竜骨をそなえていたヨーロッパやアラビア地方の船は、船底部がＶ字型をしていて浮かんだ時の重心が低く、起き上がり小法師と同じ原理で左右に傾いても復元する力が強かった。

　わが国ではじめて竜骨をもつ船が造られたのは幕末期のようである。1854 年ロシアから下田に派遣されていたＤ号が、地震の津波に襲われ、60 門の大砲をつんだ 2000T 級の木造帆船が運航不能になった。500 人のロシア人乗組員と一部の荷物は陸揚げされた。彼らがロシアに帰国するために、80T の帆船が建造されることとなった。乗組員の中に設計技師もいた。新船建造にあたって、下田あたりの船大工や人夫が 300 名、ロシア人 500 名の計 800 名で、22M 三本マストの様式帆船が三か月で完成した。

　日本の船匠たちは、竜骨をもつ外洋帆船の建造技術を初めて実地で学びとった。それ以前にも大型洋式帆船が二隻建造されたが、文献を頼りに造られたもので失敗に終わっていた。なんでもかんでも、真似して造ってしまう日本人でも、大型船の真似はできなかったようだね。

　遣唐使の最盛期には 500～600 人もの派遣使節団員が 4 隻の船に分乗して渡っていた。黄海や東シナ海では容赦なく多くの人命を飲み込んだ。新羅との関係がよかった初期には難波→遼東半島という比較的安全な航路がとられたが、新羅との関係悪化にともない、東シナ海を直接横断するルートをとらざるを得なかった。

008　湖北武奈ケ嶽 230120
◎今回の山、「湖北武奈ケ嶽」はオレが何度も登っている比良山の、「武奈ヶ岳」と区別するためにこう呼ばれているらしい。行く前に調べてみたが、いつも見ている山のサイトには名前だけは載っているが、ルートの紹介はない、というようなマイナーな山のようだ。湖北と前についているが、そうかなとも疑う、いつも行く、「高島トレイル」のひとつのようだ。
◎登山口の、「石田川ダム」で、「ダムカード」をいただいた。出てきてくれた職員さんの話では、ダムの駐車場で去年は雪が 1M も積もっていたという話だったが、駐車場もその付近を見上げても雪の気配はない。石田川ダムから琵琶湖まで直線距離で 5 キロ M、日本海まで 10 キロ M という位置にある。
◎茨木から湖西道路を走る。比良の上のほうはうっすら白いが、小浜街道を走りだすと雪はついていない、「まったく　今年は　どうなっているのだろうね」例年の 2 月に行く富山の雪かき、もう 10 回は超えているのかな、これも去年に続いて雪がない、行かなくていい、ということになりそうだ。
◎ダムの駐車場で着替え 8：30 歩き出した。ダムには水が溜まっていない、細い川が普通に流れているだけだ。大きな音がする花火のような雷のような、振動が伝わってくる、一日中響いていた、自衛隊の大砲だ。
◎林道を 10 分ぐらい歩き登山口の札を見つけ登りだした。明日からしばらく傘マークだそうだが、今はおひさんが照っている、空気は冷たい、防寒ジャケットを着こんでいる。
◎1 時間ぐらい登ってきた、5 センチぐらいの雪が積もっている、「うれしいねえ　今季初めての雪だ」出発前に着替えながら、スパッツ、オーバー手袋、ピッケルは持ったが、ワカン、アイゼンは置いてきた。
◎上に行くほど雪が多くなってきた、キュッキュッと雪が鳴る、積もったばかりの真っ白な新雪の上、獣の足跡、シカだ、ウサギだ、爪のある小型獣、小さくまるこい肉球獣、どなた様ですかね。
◎尾根道に上がりひとつのピークにやってきた。「三重嶽さんじょうだけ」と読むらしい。かすかに雲があるが青空があおい。尾根道は低く細い樹々がたくさん立っている。葉が落ち小さい小枝が天を差す、「きもちがいいねえさいこうだ」
◎でかくないブナの樹々、幹が一回転、「のの字　への字」を書いて上へ横へ、よほど風が吹くのか、雪が積もるのか。右には琵琶湖が見える、ほんまもんの武奈ヶ岳が大きく見える、伊吹山も鈴鹿の山も見える、大砲が響く。左には谷筋が末広がりに小浜の街かな、その向こうに半島や小さい島、日本海が見える、若狭湾が見える。
◎11：15 湖北武奈ケ嶽、865M 山頂の標識。例年の冬は人の背丈ほどもあるこの標識が見えるか見えないかというぐらいに雪が積もっているそうだが、今日の積雪は 30 センチもあるだろうかね。2 年ぐらいから異常気象が急にやってきた、こんなに急に異常が続くとは思っていなかった、徐々にやってくるものだと思っていたが、でっかい地球が、ホモサピエンスのでっかい行動で、ガラガラポンと来ているのかね。
◎ちょっと早いが昼飯を食った。昨夜はウイスキーをぐびり飲み、今朝は 5 時に時計の音で目覚め、慌て弁当を作り、朝飯を食って、まだ真っ暗い 6 時過ぎに家を出た。オレの腹はまだまだ正直だ、すぐに腹が減る。歩き始めて一本目で手製のサンドイッチをほおばった。弁当は玄米ご飯に梅干し、野菜だけ炒め、サラダをいただき、お満悦、旨いねえ。
◎喰っている最中から一気に曇り始めた。気温がぐんぐん下がりだした。「さあ　降られないうちに下ろう」
◎高島トレイルに沿って、反時計回りに進む。急に寒くなりだした、雪でぬれた手袋が冷たい、慌ててオーバー手袋をはめたがしばらく指の痛さがとれない、冬山だ。毛糸の帽子だけでは寒い、上着のフードも被った。
◎どんどん下り、トレイルを離れて左折、下って登って、赤岩山までやってきた。角川集落の標識を行かずに左折、このあたりから道しるべが見えにくくなり、斜面も急になってきた。「おおお　ややや　ひっくり返らぬよう転ばぬよう」ここは、人があまり通っていないようで、道も荒れ、なかなかに歩きにくい。
◎どんどん下る、雪が無くなってくる、下のほうに川が、道が、ダムが見え始める。
◎1：30 頃に車のところに帰ってきた、なんと早い時間だ、5 時間の山行だった。着替え、コーヒーをご馳走になり、お菓子やパンを喰った。家に帰りついたのは 4：30 だった。同道は久子さん。

009　オランウータン　280120
久世濃子著＜オランウータン-森の哲人は子育ての達人＞
　オランウータンの本を借りてきた、なぜにオランウータンかというと、前々回の当ブログで、本田成親先生の船の話が出たついでに、先生の 20 年以上前のエッセイにチンパンジーの話が載っていた。この先生、理系の方で文章のプロ、その話に引きこまれるように読んだ。多摩動物公園：飼育の吉原先生が先生の友人だそうで、担当のチンパンジーの飼育の話、会話、想いあい、けんか、それらを聞いて、文章にしておられるのを紹介。

　チンパンジーのボスのＪが判断ミスを犯した。けんかの仲裁に入ったＪが被害者と加害者を間違えた。真の被害者が泣きわめいて抗議した。多くのチンパンジーたちもそれに同調し、メスたちが結束してＪに批判的な態度をとったり、無視したりしはじめた。すっかり自信を喪失したＪは、ノイローゼ状態に陥って、飼育場の片隅に座り込む事態となった。ピーンと天を突くべき象徴物もうなだれっぱなし、メスたちからはますます馬鹿にされた。吉原さんはＪを特別室に隔離し、彼のために蜂蜜で割った特製のウイスキーを用意し、自らもグラスを手にしてどっかり座り込んだ。ベテランの飼育係と長年生活を共にしたチンパンジーは、普通に話す言葉を 9 割以上理解するという。吉原さんは人間を相手にしたときとまったく同じ調子で話しかけた。2 か月ばかり続けた効果はなんと絶大で､すっかりストレスのなくなったＪの心身､いや心チンはたちまち元通りの力強さを取り戻した。

　想像以上に知能を持つチンパンジーだが、彼らの身体能力もまた凄い。吉原さんは､「チンパンジーは猛獣」だと断言する。その握力は 300K 近く（元気な男性でも 50K たらず)、80ｋの鉄板を空中にほうり投げる、引っ張る力は 350K、垂直飛びは 4M 近く飛ぶそうだ。

　面白い話をもっと紹介したいが、オランウータンに移らなくては・・。久世濃子先生の本、失礼ながら面白くない､一般人向けの本のつもりで読み始めたが､研究部分が重なっているのか読みづらい｡｢わたしは学者だ　軟弱な文学ヤロウと　一緒にしないで」と怒られるかも・・。

　オランウータンは、ゴリラやチンパンジーと比べて、わからないことが多いらしい。研究者の方々は、樹の上のほうにぽつり座っている、たたずんでいる、彼らのことがなかなか見えないらしい。

　フランジ雄：これはオスの中の雄。顔の頬が横に張り出し、体重が増え、けんかも強い。フランジでないオスもたくさんいる、彼らも強いオスが居なくなると、フランジ雄になれることもある。

　オランウータンは､｢森の哲人」といわれるらしい。でっかい樹の上のほうで、じっと座って考えているさまが素晴らしいらしい。そういえば、ケタイな顔をしたやつを見たことがある､｢なんだ　あの顔は」と不思議に思っていたが、男の中の男だったとは・・。

　オランウータンは単独性が強く、樹上性であるうえ、成長も繁殖スピードも遅いので、データ収集の効率が非常に悪い。一本の論文を書くのに、10 年以上の観察が必要なことは珍しくない。研究費（競争的資金）を求めるため短期で目覚ましい成果を求められる昨今の・・｡｢オランウータンの研究者は　森の哲人を追う愚者である」とぼやいておられる。アカデミックな世界に身を置き、見渡せば､｢地位・名誉・カネ」の世界なのかな。

　オランウータンの孤独な子育て､｢弧育て」は出産から始まる。野生での初産は 15 歳ぐらい。以後、出産の間隔は 7 年と長く、その 7 年間子供を驚くほど大事に育てる。霊長類は基本的に群れで生活しているが、単独性のオランウータンは、出産時から、それ以降も、他の個体がまわりにいることは少ない。